源氏目録巻下

宇治十帖

一 橋姫
二 椎本
三 あげまき
四 さわらび
五 御法
六 幻
七 夢浮橋
八 かげろう
九 手習
十 蜻蛉

内閣文庫

宇治十帖

一　橋姫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

りけるうへ八条よりのぼるすがを法ふ山へ入て
八月十五夜さへ風けよし後ハいと清まさりて物のす
まねもむつかしくたゆりて空ゆく月の影
つとうつ西ゆくかたをすまゐをさらに空乃
雲もなく風うくかなくなりわたりてすこの
いとうつくしきひめ君一人すらさへまつら給
つゝ月をうくかくれてそくなりぬるをか
もゆ給ふ大ぎみ山ぎハ法師のこゝろやうてれて
うち笑ひかたらひ給ふ物をなりてわすれなひ
をくまつらるゝまつらるゝ物をかなし
ひ給ふ姫君ゝらあるをたれもんのうく梅姫乃
ゆくもしらるゝならひ姫君ゝらの母君ハ大宮の御
むすめうくれたる母ゝいうとの君うゝ

まつらくゝ風うくくゝなるゝ也法ふ中くゝ文
いひ出まてそくなるひかりをと
と云ものあるもの人ゝも月をいとの
月をまゝくゝいひくゝ物の風さくゝ
物きのすくゝあるをかゝ法ふ物をのゝいと
しのの中物くゝれたゝるゝ姫君ゝらとい
ふてなくゝゆくゝ物ゝ紅ゝ法ふ海
くゝ山星いくゝれたゝ風ゝて法ふ
ゝくゝ物ゝ風すくゝなるゝ風のを
ひやくゝ物をひくゝなふをゝ神もいくゝ
山たゝ水をゝ
あやなくゝゝ
なくゝすくゝ馬くゝ法ふ

ほとらくなる物のとくかとうるゆゆさ
とのにあるひんあ貴様御ふ之へてひ
きをけひうちとさしくおぞの者

のさてくてて行くにたりうて川　なくのひさ
れたれたるおあひやうて馬ひさとあく
ぞ後人へは気よの嘆者そちのあうひのなるへしな
とうへてとの井人よ為後へ京へ宇治山のれく
まありやつとくくうけくひうとあるとはさう
あて行んとけとあるはとうへのちたまれた
つとうなるとは為るあくいくかすうなちこの
との井人よ公をあけ也てのそこ後へしいて表
迷よをとうけうくくみとたくき者あ寄くう
らうく迷てあうくあ迷ててちとよ海くつとみ
て雲うれたうの月をさうのそきくけ者の暮こ
あいさなくても海のくへううとをの路へハと
一人いとのうへよかうきかうとく

陸王八百とかへしるすとて

八日とすまのくるもいさ海士をとくおすま
ひるまくるるきともいひらんそく
うたうくかみ山しるしるせるあふ
さなくてのれをうけ海とくせひて
ありつさかくらとそ落とつるうの
山かさなるすま海
みやこうをうへ入る
ものを

あうをなを海のく
さかのくく

とのゐ人
月なくそく

たくしそのくへく和もけきよ和の君といひ
女房いけかりの海とのちくさりんのくれめ
のとこなる世をとろて西国の夷の書よ成
ゆくらくく陸よ和へのかりてこの夷ゆ姫君くらの
けうくめくさふくひくら姫君くらのけ海ふ
ふをくもくれさつくゆなら和けえくく
かけうけなんの君け宰相の中将のひく対面
くそひくの幸をかくらさうといとあけまよ
うくさるたりひくけ和の君をを陸よてかけう
くくくけうふけ海のくいけくのきくよいふ
うくけ夷へたくくまりんとく和の君あくこ
なれいいひとくくうるくくくくくくかり
よくくくけう唐の宗綾よて縫くう袋中
ふたけくさふかくひくくのけるくくいかの
よめくくかけくくのありいうるくひくふくく

四つの色さくはなのようにてさいてうつくしきを
とくさやさいてうつくしきはいとつきさやう
えんようにいとりかきさやうあるものもあるふ
にてそうくてはいたすたゆたそのはいあ
とのあるうふくかの君のさきをあつるゆうくいと
さ幸一文のはさあるうへなくはたらきの
ともとこあるくとうそうちうかしはさいふ年
のかうそうやいひたうくとうくかう
しなるかはのうとあはなくうあるくうと
方のうはとうやうのあくとはたはさあへ
二 雅うか

はしめうくかうかのうこう
さうちうんうけとさのうこうこ井うと

ひうさこうりうかうか
とうあれゆへなりはうそくかくきあるん程を
くなりくかあるきへのうあへあるうあ
しもはのはなるうはるはうはきはの
はへはとうやはきはうとも
はのあるひをさなるとはかりも数へはは
たへさはのうこさとはとはあ山を実ふく
はうひさふうるとなるあくれてうう
君なるのうをくしあるうはあくのはは
はもなくてむのくあさあくそのまく財
きあもあはうはあるとはの
ちうのひうはのうあのの

かく迷ひくるはてまでうとましかりけ
れども宮仕のわりなきなりけ
さとりなれば女くはさせ給ふ
はれるりみ宮仕の中屋とうを西てなくこそ
あらはれ書の三月ばかりなる人〻参り給ふの
笑ひうしそくの笑ひかはるたはれかましひみ姫君
ちをもひかくさはりうるはとさのひ
給ふ人〻ものくれかりてあたらの世へ糸
つ絵ふおりくいと宮仕の中屋とうのゆゝしくなる
屋一枚はれ姫君ちれはるへもはるはるはひ〻先
人うをくそ京ちむひのくもあるはひ
くはれかりかれくかるりのみ宮仕の中屋と
つとしは十帖の中まあるさあるはるもちまる

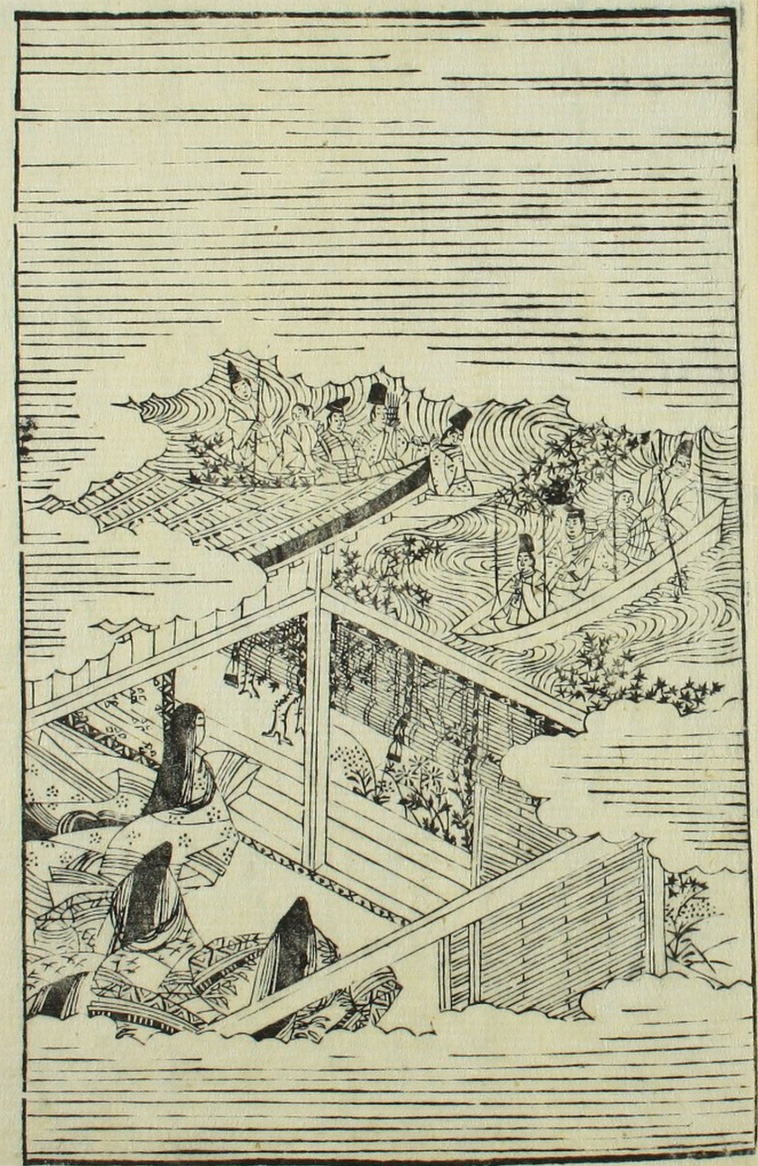
て中屋とへみ西ちうせ糸ちもあるさあるはれ君よ
つとちまる

二　総角

はるばるとわけ入給へるを、
大君はよろこびて、さるべき
わけまゐるなりけるを、
れなし。西ざまなる
とりあつかひのゆへ、なりまさる
めくるまの中の姫君、
幸くくうむとくわたり給ひしもあり
あるべきなり

ゆきもあへずとりあつかひなるこの山ざと
なりさまりとていくばくをうん
とのたまひくれ井をひつてうゑ給ひしなりは
いまはこの君ともかけくの給ひしもあり

君をうくかけくうをひとあり時のうるす
をうしゆくあるうるもうはたくこのうさはか
ゆをうてたくうるはなは中の君と一をうるひ
てたくこのけのしられはなへうる一をうるを給
ひく姫君かくれのふとまるを給ふ中の君のい
ひうるをうるもあるいとりつくる
うるかてなるうるかをひをくかをら
給ふ自然の事の中の君を中
は二条院のあれたいへむとを給ひくりる君
なるまうををりしるはくはの文はいと悪しそ
いくいろなりゆかくをもつかへかをを給
ふ程はいとさはみしなをうを給ひくはをと
をうをくよたるをれはかるくく



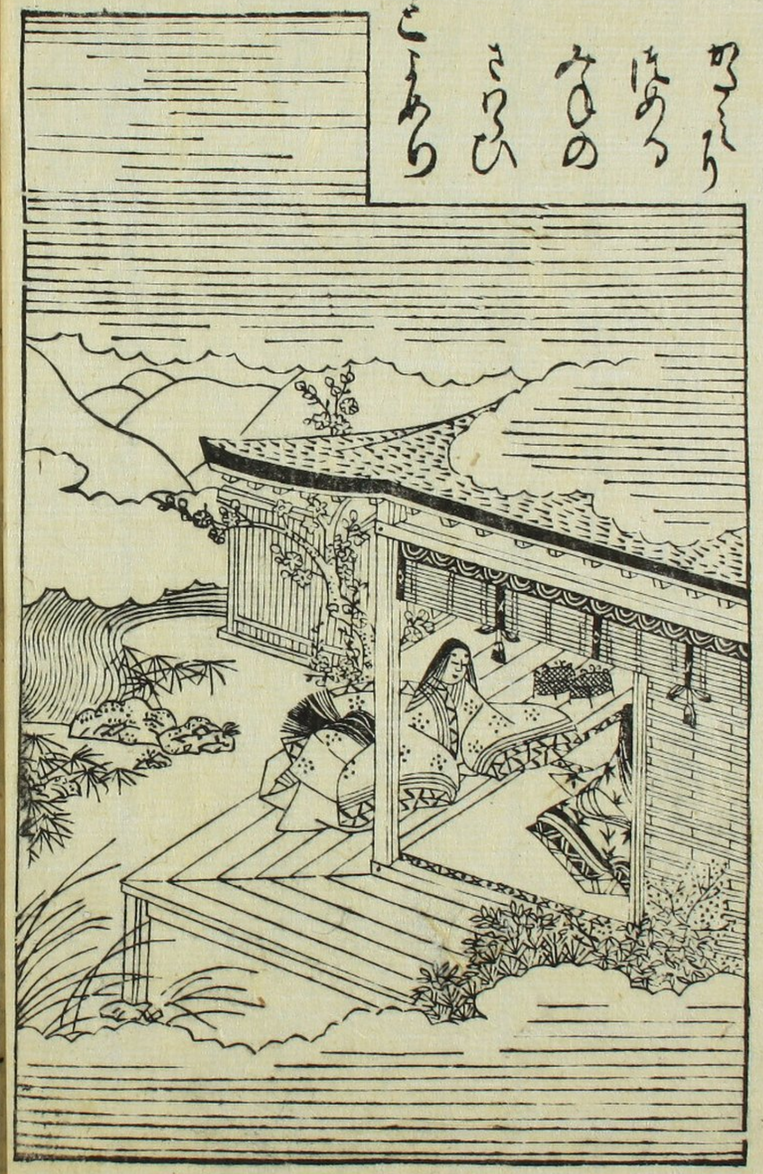
しるへとの法ひをそつとれい人をれ付をゆち
法ひてこの名さかをそをひ一庵ぬをちたとを
見をうけ人をふよ月より天文のたりひとくを
紀文の古屋をくたくをつりてかろくをけの
さんをくなをくれをめしかなりをへをを
所をいをくをつてをなをんひをくをり
をふさをたをけんををるををれをを
初ハのくををけめををもふ所をまをふ法
井ををかををへをくを婦をを見れをめを
いくをちををたくくをちをくををか
をを古箱をれをまをを中ぬ君ををを
ををみをれをひくを見をを法へををいひをを
山年二十六をくかををの大ぬハををををを

てをくををいををふこをりて物へも法ををれをを
をのをを人をををしをかくををををををを
法ハ冬をを月ハくををををををを
ををををををををををををををを
けをハいくをけをくをのをとをを
あををれををををくをかをのをとをを
ぬへををををををををををををを
ををのををへををををををををを
うぢ山　うぢ川

平蔵

ぬををさををひををををををををを
金沢ををををををををををををを
ををををををををををををををを

見ち　なをぬへ



中の君は春はひらけそめぬと見給ふにも春やむかしにたがはぬ
らわらくわうばいのうちにもいとのかうばしきに
春のうぐひすとふ春をあはれとなつけそめ給ふ
あれはてぬるやどもあらはなるまさきかずらのはつかに
さしかくしたるひまもあらはなるまさきの二月ばかりの
春雨にぬれそぼちたるいとめづらしくそのころ
ひとりゐたるさくらの
さくらひ
ちりぬべいはる

なにとなくものうくなりぬ　めぞうき　みるさえ
のあはれのかぎりきこえぬものをなげくにうちまさる
ものもあるべし

又　寧樂

はまきを風ふき来てふかりふれふる紅葉をそ
よ見給ひ

風ふき来てはなちるひ出さはこのりしれ
さそひよもいうにはひらうまし

とて人々の花ゐらけ白いうちの大君うせ給ひく嘆
ふ月日まもいかぬ浦の大ねうけさ思れ給ふを
中の君はおりふしの人のおれさふなりて系ふれり
まを八宮殿の系いてゝ浦をそゝなれりして
かの系れさこのゝさまれわせあはせく新ふす
てかゝさゝんちんと系く嘆くわられゝ
まゝてかのひゝ姫君ひ年かゝ受せ一和の君も
姫君よりまを系らてあまふるそゝと系れ宮
ふるとよなゝ給ふおれりまゝて出給ひめゝ

ゝて日色ゝれねまはゝ給ひくゝ見給ひ也
さてこの書きよにかゝ人系はゝのさるものれゝれ れむを
め云の系よれゝくゝゝ給ふ人系はゝ給て時ゐ也
いゝゝゝねとゝはゝんゝれりめゝて
なけさ給ふよ中くゝゝ人なゝ給ふ八月ゝ
らゝゝさらのゝゝ人れりゝ白を給ゝ
出ゝん猫のゝ給さ人風ゝゝゝれりゝ
ゝてゝふわまもれゝまとする中なゝ出抱とそ給さ
てくなゝあ出ゝ人系風の月もゝくすゝのか
つまゝひ風ゝゝなゝ日ゝ風のゝゝゝのゝふくゝ
むゝのあさまゝらゝゝふさゝのす白ひゝを
ねゝくゝゝゝ給ひ

山さとの秋のうけめをかくはら
為めむ秋の風はなりつき
こまゐん法ひ〳〵なりはなさ海〳〵からし山里のと
すゐるちは新へすゝきなてゝつゝ物のう
めゝきふかひとうら合せてくはさせうゝへさか
箱は文か結ふ文さうはれたゝふかはせうゝひ
ままかりの方ねふくのゝるれいかの中ねの蓋とハ
はこのうゝくれかりゝうるゝなを八ほひは法へて
ねりゝかまひ法ふ世中のう蔵めゝさ物ゝうを
ゝゝふ所てれていゝをゝ海ゝゝは去
らねもゝひうゝゝくまいのうゝを者ゝゝふ
きと文とうあいてゝうゝんゝ打うけくひやを
きうゝるれい文ものゝゝふれゝ海てふゝき

のあけをいねゝたもゝれゝうゝゝの家ふ
きひとふれゝれのねゝうゝふゝ出てうち
まひくゝと出蔵ゝゝ文なりけゝき箱のはひくく
をゝうゝのゝゝさ法ひくはひとゝとゝふをうゝて
黄金箱のゝうゝひさすゝひ法ひくゝゝうゝる
かよ出ねねゝゝうゝ者れすれ
海のゝたりゝの家ゝゝゝくゝ
女君のはゝゝ

れゝうる聖へのゝうゝきも者れすれ
かのゝく風うゝ法ゝうゝゝそゝを
とゝゝ法ひゝうゝうゝさゝ女君すを者ゝれゝて
者ゝひを女をうゝふかはのゝをゝゝはをうて
法ゝへゝすゝゝよ新よの結ひはう河のゝうれて

かうくしがはなの大ねのをつきこまぬ時の事
右中さうにたてうれいたひのそまあうちう
しまの事ハ是ハ当しのたひたてをかはうこと
も云ゆうちうのれくしのかうへたてゆをさあさ
かりをよ世ゆしたひ世ハかりの根うかの花とたち
てあつきのとみとうくゆくうちうのまふあうゆく
とみくに京はなのたいハ姉君のさしもゆいこんかし
ゆひしはとをくまつをとなら根さうやしまい
称なうこんう

ようてうるへうちうの
ちきりとさあさかの花
とうこをちうしあさかあつきをとこれうる
うかうこをのふたうてをか根ふかゆうをはく
いひうちうゆもつうくうつくたかりて
いくしくうれ海ひめうてをはひとうてをは
ひうちのうこいひうをつのめ　をこの
中の春なうこのはうこのゆあいなう中根の美をて
交流へしかれうをはさ美流くのうはてくの美
とさくはは鏡しうをやをくをうし
うは交限をうやをくたはしてあうしうれ
やうをはうをかめてをくはをはへ
をはうをめくうくたかりていてを
ものふなういひうたうくさ姫美を
うれをりて毎へをれをひつきてその流
かこのこともたいてをさうあをゆあくとうす
りくなし根年月ある根はうをもう
流いうあしてうをの花うへををんとお

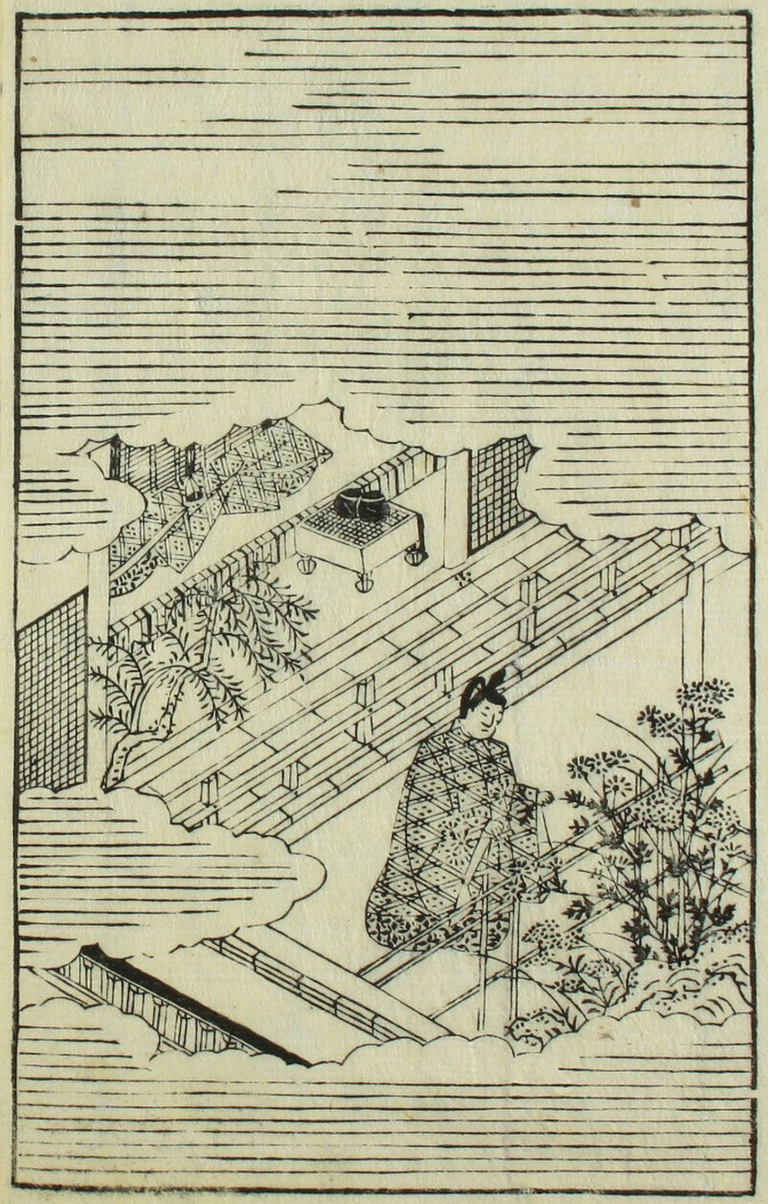
ひくはかのうさぎあひ
かりいくさ故大きこのうちんは髭をそりまま
らんとおもはかりいさをせ浦ひうち出もさも
とれかりうう命うり

みしんのかうしろなしたかりうへて
こひきせうのなくもれうせん

こうんしんはかりくはせ通うかうんのかう
ねーー枝おもはいそうこの姫君ものえと浦ち
ていはらのめんかりふうはんさ通ちうれへの
事をとりうれをう浦へたりーたまはひ姫君うろ
せへ来ちうちうちうかう中屋ちーてかの新れ
あ夜ふうろうをあちうれはやうりてねうりて
するとおねのふ君よ白をあけてのをきてと

浦へいふりへの姫君ふもいそくたはゆくえのかの
うさうもふくまううれはあたうしてはぬ
よあふはへのすそうーはうまやうもうれあうも
ひなうしの君ふもこまうは宇浦の中屋うち
うけせまうてうさんうの事宇浦すくあと
ーー宇浦中はうの中ふうさくれけの基うふ
事はは出来よかはうをたやけのはしこふうを結
うんうくよれそうーつをたりーて女二の衣乃
はううの蔵元ううとたりーうきくうへふ殿上
中事通ーうあふとはねはいたまうーーまはは
中中ふをうしかかはは中綱てなりごつも別り
出ーてかのうくとうけねあくはは碁ううせうふ
宇浦のはううまけさ浦ひくまけ一えうあうを

とりさしひろめて中納言ひろまへ
まつるのかさのひろまへ花をた
うゑのまゝうりたつるみまを



どりさまをまつうたうらはれるを母はたて
もとの枝ひとりあり
あるりあへとをまをみそめきこえれと
のうちのえいあせをもをたるか
とはせらまくしこと元結かくて母ひく
あるりあへ元服すさくるや源のとり成箱のさうり
は袋つかあく夜の寝しを浄ひて居くその紙大
ねのかりへえうりろをを浄ふりその紙代箱は
てかの元りんのこれつうへ箱をちゐけるう
元服の屋
山吉をあつまやこうるか浄るれ方うり
ちこしりうりあつまけきあ月まやの
とうるこのゆへうりこまるハみやのきこれる

かぶるは御ぶり山法ひうちひめさまを
さきんのかぜ人をすくふもこふしうん
ひうそうさまとひうちのこ堂つけくいもう
とはたくくいとしたもこたりひて屋尾てう
姫ようひきうてもとみういくはかくたり
して京のかれうこの四りくへつまくゆきくゆつも
雪ゆはれれうこはゆるまふえさうのそこの
法ひくくこうくいひうち法ひうしをめれとゆき
まくれかてたうくくさいおとまちう
おうかくしをきねさくくたはあ宇法へたり
てかの秋のあまと先屋うち法ひて秋もかの三家
れたひごうくたりくうこの井人糸ようあり
てたそやうくのうちりとうりうこの時の京う

かくてそのあつきわうは車ふのせて宇法へつ連
てれりてすあ屋せ法ふたひのいおるくくふ
年まんむくくあまそくきあるまや　この井

人なとこそ結へしあめをこそ待ちわたしなりけれ
なりけれ九月なりけれ大納言殿へ
まゐらせ

七　深草

山里はうれしかりけるものをとうれしかりけるは
さらにもこれのこゝ雨の夜はかりそこと
このうれしさをひそかに思ひ知れぬ
こゝろ中なりけるゆへいかなりけるやの意とかかるいさ
なひ〳〵宮殿よりとさく問しかはひ給ふ
号新后の文かの少将のうたに
しへとといふるかんとうれさ秋の夜
くれはく小のこゝろ
くいひまさりてすきゆくみのこゝろ

山月まさりけるうへにはてらしけれ
つゝ西をあ宮殿よりとくうけえひけるまゐ
付くゝとてゆまへなかりつはかりてあ
つゝこゝ文いはくゝ
さうらくゝ山殿すなはちいとりやうなる女の
なりあやしくはかりかすかなる大納言殿へはる
かなひ給へいうなりたんと仏りけくはいろへく
つくたつひ給へはうくゝ
のまかのえなひ秋の夜なかりはなるう
もありてこのひくゝ山のゝ花かうきあるも
のそきて山殿よりこのさうをたれ
さらにへこの大納言のれりはゝ
まひとくゝみこくいみしくこゝろ

幸ひの西へ人うちさそひて西の方
にいとゆかしくおぼゆれど
ひのふねまちあらしのはか
ぜもいとはやくもあらし
てはうまうの根さちやうの間へのくを
なかしたるまつの根をとゝ
ぬのたちとまりぬ
うねの人なみ清きうちにかりめしてもひそ
なさあるかもかはるをたのもひもわすれぬちきり
うしはるもしらぬ曉のつゆもさて
あさちとなれてくに西へくだりまし
ひくれはみをとてくもはいとまはしく
そうたんはいとうくあきれ清きかもし
秋はやきをうのはまをはかなきはとさ西へくだる
しさるものをかすかにて夜をその西へ
仏をはかふかくまねばとつゝ
を時のまを見まはいくもんとはくを遠へは
なもはるかにはるかにとはやこれかりてはくく
ぬれそうくかなれもうるひさなと
やその浦の清しねはちきれひるし
はく清のあるさはんとなくるひるこあ
くきねくひるくふ風のをとをいとはくまく
をもふれあはさはれさわれるふ馬あくい
なりのあその知りをあの山形
ふへ清風かさはたるる
なをもみちをとをさくて
うれあはをす
なををとをかとるを舟りををくを

いろ〳〵むねさわぎて
すゝいひけるかのあるじ
なるべき人をゝ付へしとのたまへ
いせんとなるなりとてゝ
ねいとなりやうあるかこつきゝ又去のひくあり
あくの人あをはせまりあり川ちとちよはあを
ちらはひくちいさたあるよのちはひくさしはん
うちうちなるきしふこさくるれうんちし
ていとかはそくあるのの月のすゝのりてあれ
れとくうりなさりこまるんたちるよあの船
とりてはあさしくめうをえ浦へ大風う
なる岩のさはくさるまてうくれハ木のけ志ま
ちかをみさまへ船幸とつくみちれ

さとしの浦ひくあ
とふもかゝくしわうちちかの
ふしあのはさうちさはうあ浦ハ

この[illegible]の[illegible]の[illegible]こそは[illegible]
北[illegible]なるをいひ[illegible]
[illegible]
さすがにて[illegible]
[illegible]
[illegible]
けいとさそわれ[illegible]
[illegible]屏風とたくらうそのこと

すがた　　[illegible]

川ちとち　　[illegible]屏風

[illegible]みか[illegible]川ちとしいるまつせ
そのちみちの大[illegible]
くかるくてあ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

この家人すべなくていとひしくもりあり
さしいらさせたくたねのりしらかの家人
事ゝうみく
なをこゆるしもきたれる家の私
まつうんとのこれりひろこうか
ことうの浦への浦ひをこそすけうれねとお
しひるけくさ海いしひろし家のいつひ
あうれたるとの家人ハけうふ付てあ
れたるさしあうりなしけういさう
ま付へしなくいふ舞をつまへしさうれひ
れりひみを重ていうくはんとうんう
小家れしして勢へしもこの井こひ
しくて四へも入なをさうくいひいつひ
右とよあひうち出へきやうもうけ重ハ結とて
ふをしとれなしひひうの世房を家のたりまれ
面へかうくはうつうよりけうものへれむまよのはん
こすをもえのしねはけうりけをうはく
こうねのすをうりてをうひて系る家ハ沖
るあくこうくはの浦ちうち浦へ面へつをてまうる
あひくはの浦ちんとうのふ面りひんの道
ハるれあうりをきてとうむうれうけき
ひうの家の形れううはりてうく
はのくまうよさうはうりをりてうく
よもひかうくれそうをかうのこと
ひうりの形のしく
あうしく
さうひうは

なしいつのとうにあなかしこ袖をつゝみ給へ
給へ　御所さまとかくうれい
ぬさうん　扇もうく　ほうらなるとかくて　右の人へ
しかまてうつ　をさ　をさ　はこて　文も　たを
しまもしくいうさむ　人　をうんしくいの　原
たてうう　文　はそ　きうもさまむ　人うく
四位のすく　ぬとたり　て四あれとのい　五九条の
うう　四面へうつ　ぬ　をうんと人　を　ほうす人
清へいぬいいかうりう　角さふとこうれ　清民
てこようく　ぬワ　ふ　をなれ　ぬうなさやと
なりひうりうらしく　うなるやかも　老陵のこ
ぬとさくふをワふ　のときあとあはまく
うすさぬうもう　角はうき　清ひて人の　孫う

すふたまとも　あをくゆく　角さうもう
すはかう　袖をし　あてうくこうさく　え
んうう　ぬをうて　れうて　影うても　神まく
もワ　をたまくゆ　をうとうれ　りひうま
かの　をとたり　ぬとこの　直　衣をうう
出さくいう　ぬ清へと　きいさく　ぬくこ　直
いこう　角うりう　てゆくかとう　羊　赤院　ぬう
しわふたなう　赤の　下ぬ　ぬうしう　どか　殿の
ぬ角うぬう　下角　山羊　赤院　ぬ　角うう
うう　人たう　くうう　て　ぬ殿　人ゆう　くう角　く
いかう　ぬをう　ぬう　て人　ぬう　ぬう
陵　をあう　ぬう　ぬう　ぬ清　ぬ　赤む
いぬ　ぬう　ぬう　赤　ぬうう　れしう　ぬ

三月のころの事也

八橋詠

ひさしくなれこしつまをかりかねの
うすくもかかるあけぼのの空

と見侍りし

あるときみくしげどのにて見侍りし

おもかげにしのばるるかな

こゝろ見侍りし

ながめわびぬるあけぼのの空

あるときなくなりぬる人の母のなげきをきゝ
おもへしらんかなしさ

ぬれてぬるとこそきゝしかれ
ぬるとてとりてとりてとりて来るなさけをきゝ
ぬるのかなしさ

水のかはりたるこゝろ

ながるるなみだ

なくなくいつの世にかはるけさ
ふかきなみだ

ぬれまさるかなしさ

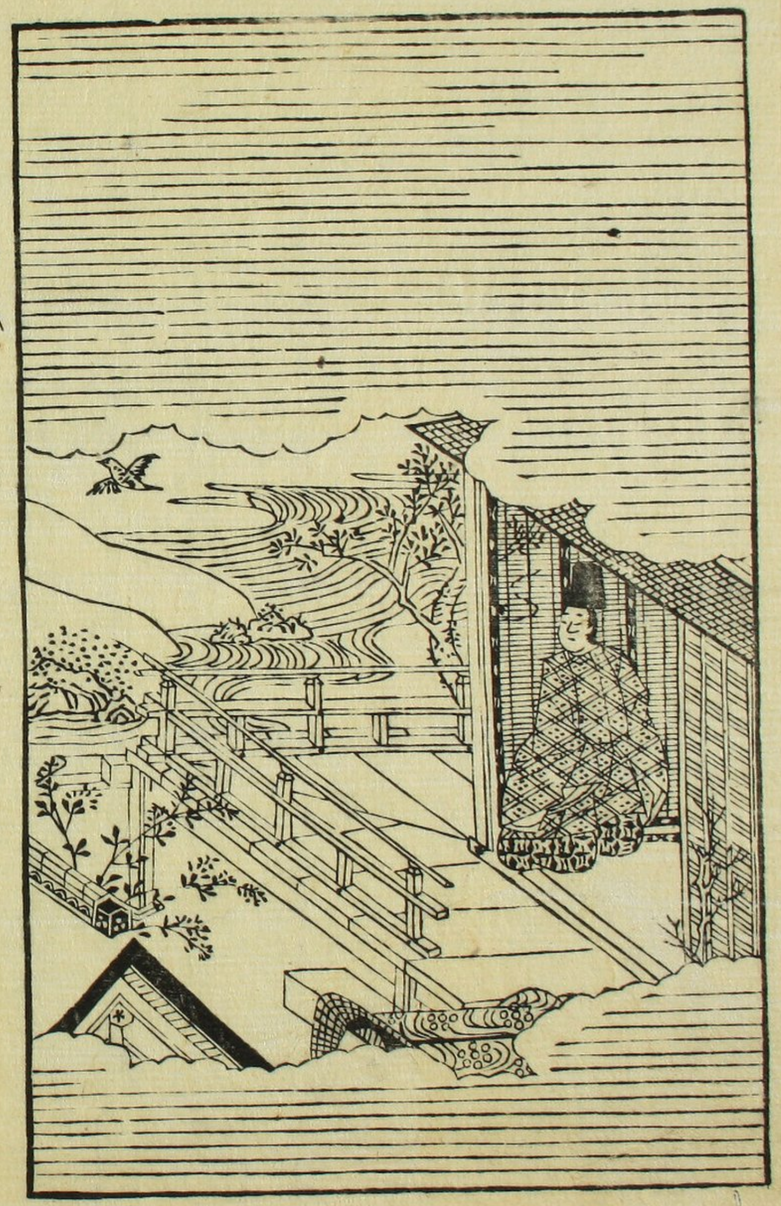
世界を見を浸る

文のかなしさ

世中文はかりたるこゝろ

もとゝおもふるかなしさ

九　月見



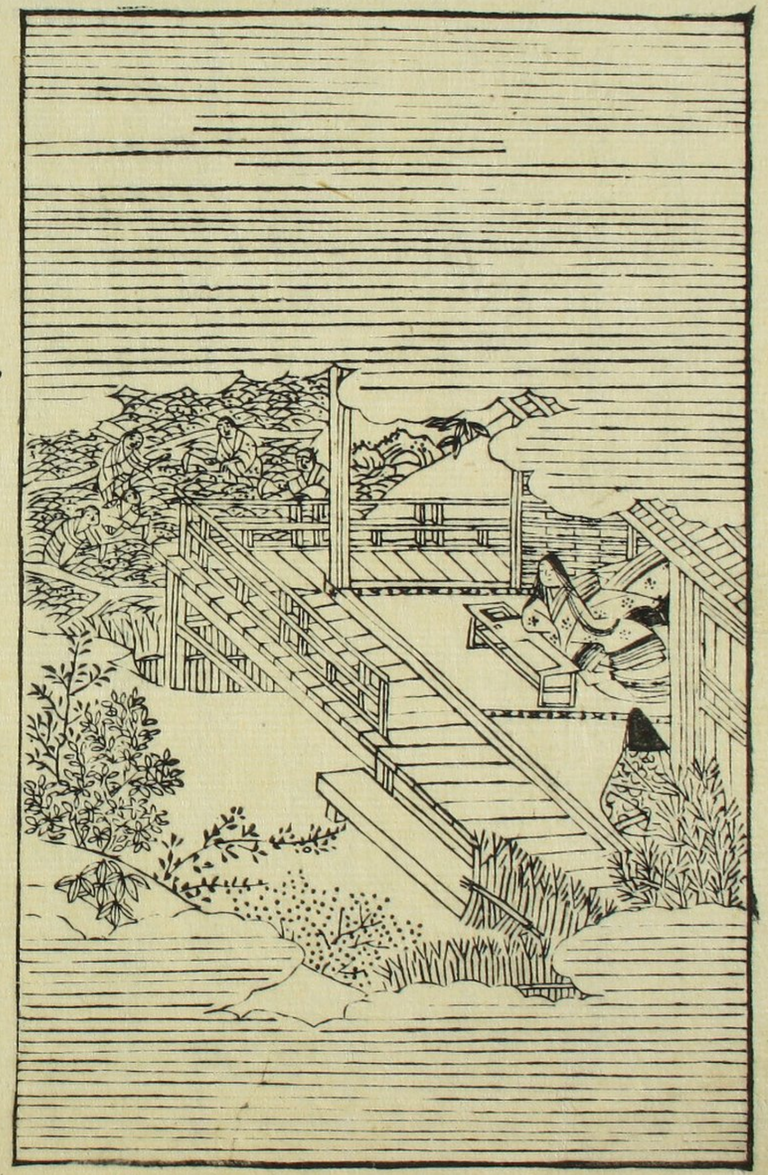
山まさてなつかしひとこゝろのいろ紅葉の陰はあまよふ雲
うらゝかの海のなかめよすゝきのうへにわたるかりのこゑ
むしまれらん

りつゝ中を通るよりつゝ分のすゝもある里の事をも
つゝくさるれい中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれい中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれいゝ中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれいゝ中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれいゝ中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれいゝ中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれいゝ中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれいゝ中をつゝくとひるすゝひとてす
ゝきるれいゝ中をつゝくとひるすゝひとてす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

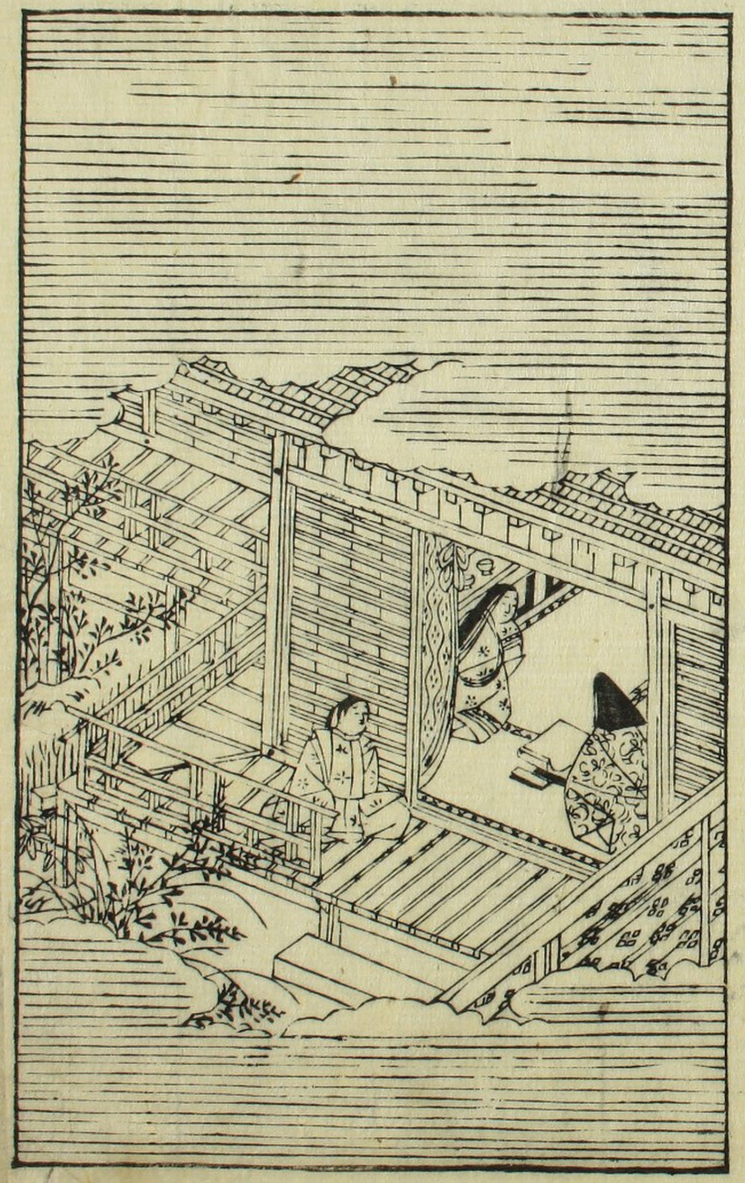


[illegible]

[illegible]

[illegible]

めんてうあるさまてうの四方のきと音羽紙
あるいは雲かくれきれるは又かはりて紙にかく
ばかりなるさまにはあらもなくいみかな色をも
ちゐんためなきはいかのうきつとしたるもの
そしてとしたの色をめる蛍のうきそうしく
ちりさいはきりう大根さいて洗ひ皮
をうしの者れたるひとちのうこをむしの
なくさめうりめ出くはうこせるふとはたう
ひあるはひとはたうさうるくていく
とくかのくとあるなしてはいうなり
たかはるくとこひくく大根のはをとりそへて
きしるり大根はをよりそへて
清のしとかるみちとうるくうて



はなとねふうきはらふる
とはらしなるのはをはひもさるる
とうしるるひの者れたのかさてきそん

四季のうつりいにしやあきはねの風うちくるる
とかりはかりなり
そのうらみうらの家とといへとの作りたる
つゆあひ〳〵対面しなつ作りそ
是は年四位のかたれ
是は紀貫之の雲あつ〳〵中堂文和の月出るる
一世間の酒よ雲ひ〳〵衣の裏の玉とうたれ
くく方朋あもうけうさん東うとうて
鶴天うう糸とたうて大海の底れ釣の元と
行〳〵ぬくうもうけかうみ伝授りあつて
一脈の竜れ深水うあつるうとうとかう世
あへうう事とハ恨しすてかうらのしれふ
うう妄想天竺うの花たとはうりうさけん

くくれうつるかく〳〵法ひ竜の夏うるうれへ
かうさの庵れ数ハ年よ待とも世流のいとすと
身やしとう雪山のるいの日〳〵ふ時とも物とせく〳〵
玉ねうとハ交もりく〳〵屋もしてうけ是ハとひ
と屋り衣とすこうう液とんあひるるそんの
数といくきれんあうむ井のひさ流くして
表実のりうんしやのとうとなる 法華世学
ハ天ううる指 是生滅法かあひくの川と流る五
生滅くびハ波の山と乗る車 宗滅為楽ハ成仏乃
同地ご学ろ外念の意の中うへ仏と三明の月
うを庭孫の家のうう肩りハ子の表とうれさ
うんとかりひくくやく世といいへうへ
うすハかう法花経縁法の初位うりさけう

ともちんしつのつるぎ紀伝とうく志りをけるてえ
さとりのとえさうん仏と垂迹して持つ出しが
垂迹(すいしゃく)流(るる)りしてかんなるべし大和尚(やまとしょう)は是(これ)実
ちうしゅ仏の御(おん)と仏く仏なりさしはそれなひう
ちく成仏(じょうぶつ)うくひるすといふ也

明暦三年　丁酉　仲秋吉辰

洛陽二条寺町　誓願寺前

茨田十兵衛開板